１７年度「ＮＩＥで磨く国語力」№１２

年　組　番　氏名

自伝といえば、①渾身（こんしん）の一冊を②バンネン（晩年　）に出すのが常識的な（Ａ）線だろう。童話作家アンデルセンは違った。２０代で取りかかり、４０代早々で刊行した。「（１）私の生涯の物語が私のすべての作品の最上の注釈となるだろう」。みなぎる自己顕示欲に驚く▼不遇な少年時代を送ったせいだろうか。靴職人の父を１１歳で失い、１３歳の夏には母が再婚して半ば放り出された。身のこなしが鈍く劇団や③舞踏（ぶとう）団を追われ、自慢の歌唱も声変わりで行き詰まった▼学生時代をふりかえって、「教室で自分を笑いものにした」と校長を④ウラ（恨　）む。作家となってからは「日陰者扱い」「親切な言葉も友情の一しずくも注がれない」と批評家をののしる。ほめられると⑤有頂天（うちょうてん）になり、けなされると絶望のふちに沈むひとだったらしい▼デンマークのフュン島にあるその⑥生家（せいか）をきのう、皇太子さまが訪れた。小さいころから彼の名作の数々に親しんだと聞く。博物館内に再現された⑦ショサイ（書斎　）に入り、いすに腰をおろした▼失恋を重ね、働き口にも窮したアンデルセンだが、３０代で人生が上向く。（２）小説『即興詩人』が評判を呼び、国王から「詩人としての⑧俸給（ほうきゅう）が支給される。文名が高まった後は⑨ジュウソク（充足　）の日々を送り、「自分は幸運の⑩寵児（ちょうじ）である」と書く。７０歳の夏、国葬で送られた▼人魚姫の実らぬ恋。マッチ売りの少女の死。（３）はだかの王様の愚かさ――。模範的とは言いがたい言動も多々あったようだが、残された物語は人生の諸（Ｂ）相を曇りなく描き、世界の子どもの胸の奥にいまも響く。

〔２０１７年６月２０日「天声人語」〕

問一　①～⑩のカタカナ部は漢字に直し、傍線部は読みを書き入れなさい。

問二　傍線部（Ａ）「線」と同意味の「線」を含む選択肢の記号を○で囲もう。

ア　肩から腰にかけての線。　イ　面と面が交差すると線ができる。

ウ　線の細い人　エ　その線で考えてみよう。

問三　傍線部（Ｂ）「相」と同意味の「相」を含む選択肢の記号を○で囲もう。

ア　相伝　イ　相関　ウ　真相　エ　手相　オ　手相

問四　傍線部（１）と語った理由を選び、最も適切な選択肢の記号を○で囲もう。

ア　不遇な少年時代への愛惜から　イ　学生時代の校長への感謝から

ウ　自己顕示欲にあふれていたから　エ　国王から詩人として認められたから

問五　傍線部（２）を明治２５年に翻訳した文豪の記号を○で囲もう。

ア　夏目漱石　イ　森鴎外　ウ　島崎藤村　エ　田山花袋

問六　２０１４年に国際アンデルセン賞を受賞した作家の記号を○で囲もう。

ア　俵万智　イ　上橋菜穂子　ウ　森絵都　エ　住野よる

問七　傍線部（３）のあらすじを、後の語群から適語を書き入れて完成させよう。

着物好きの皇帝が、（ばかもの）には見えない美しい織物をおるという（うそつき）の機織りの（口上　）を信じて、何も身に着けていない状態で（往来　）を行進する。みんながみんな王様の着物が見えているふりをしていた。「王様は（裸　）だ」という（子ども）の一言でうそがばれるが、そのまま王様は行進を続けた。

〔語群〕　・うそつき　・往来　・口上　・子ども　・ばかもの　・裸